

## 4. 結 言

人間は心の動きを行動に現わす。このような人間の科学的モデルの試案をのべた。人間とは測り知れない生物である。論理の彼岸に、人の本質は潜在しているように思う。したがって、上記の考究も心の動きの形式的を追及に終わっているかも知れない。しかし論理で解明できる部分は可能なかぎり広げるのも人間探求の1つの道であろう。

紹介と説明が目的なので、モデルの数理解析

はのべなかった。応用に関しては、本特集号の他の論文を見ていただきたい。また、animal symbolicumのモデルについては文献 [1], [2] を参照されたい。

## 文 献

- [1] 松田正一：人間の行動モデルⅠ，早稲田大学システム科学研究所紀要，No.6，1975，p.1
- [2] 松田正一：人間の行動モデルⅡ，早稲田大学システム科学研究所紀要，No.9，1978，p.1
- [3] 松田正一：人間の行動モデルⅢ，早稲田大学システム科学研究所紀要，No.10，1979，p.17

# 第2回 ORセミナー報告

昨年、54名の参加者をえて好評を博した第1回ORセミナーにひきつづいて、本年もその第2回が11月19-20日に麹町会館（東京千代田区平河町）にて行なわれた。講師には昨年同様に慶応義塾大学 経営管理大学院 伏見多美雄教授をわずらわせた。

セミナーのねらいは企業のORアナリストを対象に会計情報を意思決定に役立てるための基礎知識をやさしく解説し、同時に伝統的な会計システムと意思決定会計システムの橋渡しをすることにあった。

第2回セミナーを企画するに当り、基礎知識の解説に加えて、昨年のアンケート回答者の79%から要望のあつ

た「さらに進んだコース」をいかに組み込むかの検討を行なった。伏見教授からは1日アドバンス・コースを付加する提案をいただいたが、学会としてのセミナー経験が浅く市場調査が不十分なために第2回セミナーは一応第1回の基本線を変えないで行なうこととなった。

第2回セミナーにおいて変わった点はまずテキストにある。第1回のテキストには「オペレーションズ・リサーチ」誌に連載され好評をえた伏見教授の“企業会計”の抜刷を利用させていただいた。その上に多くの事例研究をパンフレットで追加配布していただいたのに対し、第2回では伏見教授著の「経営財務会計」（昭和56.8），

ORセミナーアンケート結果（%は回答者数に対する数値）

回 答 項 目		第1回	第2回	回 答 項 目		第1回	第2回
参加の動機	イ. 実務上必要	24%	6	経済分析知識の識	イ. 初 歩 的	29%	29%
	ロ. 関 連 業 務	25	55		ロ. ひ と と お り	38	52
	ハ. 勉 強	37	13		ハ. 可 能 性 有 り	12	3
	ニ. 会 社 の 研 修	14	19	ニ. ま っ た く な し	21	16	
	ホ. そ の 他	0	7	進 コ ー ス	イ. 希 望 す る	79	52
セミナーの程度	イ. 初 歩 的	30	19		ロ. 希 望 し な い	21	26
	ロ. 適 当	64	81	参 加 の 理 由	イ. テ ー マ が よ い	54	48
	ハ. 高 す ぎ る	6	0		ロ. 講 師 が よ い	16	13
テ ー マ の 範 囲	イ. 広 す ぎ る	15	19		ハ. 知 人 の す す め	9	26
	ロ. 適 当	83	81	ニ. そ の 他	21	13	
	ハ. 限 定 し す ぎ る	2	0	セ ミ ナ ー の 期 間	イ. 適 当	65	39
経 理 予 備 財 務 知 識 の 識	イ. 基 礎 知 識	46	48		ロ. 短 い	35	48
	ロ. ひ と と お り	23	35		ハ. 長 い	0	13
	ハ. 可 能 性 有 り	19	13	参 考	参 加 者 数	54人	34人
	ニ. ま っ た く な し	12	4		回 答 者 数	48	31

「経営管理会計」（昭56.10，共に日本規格協会発行）を利用できたことにある。

第2回の参加者は34名、第1日は財務会計、第2日は管理会計を軸に、「短い時間で初心者にもわかりやすく、要点をついた説明」（今回のアンケート回答から）をしていただいた。

参加者に対するアンケートの主要項目をまとめた結果を付表にあげる。この結果はきわめて興味深い示唆をわれわれに与えるものであり、ぜひ、明年以降の企画に生かしていきたい。（研究普及委員—セミナー担当 荒木）